

海外長期滞在（ロングステイ）

日本人の「横並び」意識

1 「でも思い出して欲しい」

まずしばらくは、本題とは一見何の関係もないような筆者の戯言を申し述べたい。多少長くなるが、まちががなく本題の導入部分ではあるので、暫時お付き合い願いたい。

ここ十年ほど、日本では、不況だ賃金が下がったなど、景気のいい話はあまり聞かれない。株価も一時は 8500 円台を割り込み、銀行は株の含み損を抱えるようになり、ただでさえ不良債権処理で青息吐息なのに、踏んだり蹴ったりの状態に近いように言われている。筆者は、そうした元気のない日本および日本人を、若干のけちをつけながら、逆に少し元気付けたいのである。そして、それが本題である海外長期滞在の意義をも述べることに繋がる。一石二鳥と自画自賛したいところであるが、さてそのお手並み拝見といこう。

今リストラや早期勸奨退職の対象になっている熟年層は、団塊の世代にもあたり人の数が多いが、実は働き盛りの年代でもある。職場での役職数には限りがあり、また給与水準も若年層に比較して高いため、本来ならば鼻息荒い世代であるはずが、若干自信喪失気味で意気消沈しているようだ。また海外に目を向けると、米国での同時多発テロやバリ島での爆破事件さらにはイラクや北朝鮮問題の大量破壊兵器問題など、暗い話にも事欠かない。そのため、ブームのごとく盛り上がっていた海外旅行熱も、一時的にさめた感がある。



竹内 俊隆（タケウチ トシタカ）
（大阪外国語大学外国語学部教授）

略歴

- 1951年 長野県生まれ
- 1975年 京都大学工学部卒業
- 米国に留学し、オレゴン大学政治学科卒業、ワシントン大学大学院修士課程政治学研究科修了、スタンフォード大学大学院修士課程東アジア研究科修了
- 1988年 帝国女子短期大学（現大阪国際大学短期大学部）助教授
- 1992年 大阪外国語大学助教授
- 2003年 現職

この間、1995年～97年 軍縮会議日本政府代表部専門調査員（法律顧問）として包括的核実験禁止条約、特定通常兵器使用制限条約第二議定書改定会議等に参加

主要著書

- 『現代国際関係論 21世紀へのパースペクティブ』（共著）（建帛社、1995年）
- 『国際経済学（改訂5版）』（共訳）（エコノミスト社、2001年）
- 「地方公共財としての環境問題：外部性と需要顕示誘導政策」（『環境衛生工学研究』第16巻3号、2002年）等

でも思い出して欲しい。わが国は、戦後の荒廃から「奇跡」とまで言われた経済成長を成し遂げた国である。この功績は一般庶民の努力の賜物であり、その原動力は今の熟年層から退職した高年齢層の方々である。また景気が悪いと誰しもが口をあけると言い、一億総自信喪失の様相を呈しているが、それでも

世界第二の経済大国であり、給与や生活水準も世界的に見ればきわめて高い。

でも思い出して欲しい。わずか十年少し前のバブル全盛期の頃は、21世紀は日本の世紀であると説く論説もあったくらい、一億総自信過剰であった。二十数年前には、日本が世界で一番になるという著作をアメリカ人の大学教授が出版し、筆者も含めて多くの日本人

2 「横並び」意識と黒船論

筆者が思うに、日本人は「横並び」意識が強すぎるのである。「横並び」とはすなわち「他人」(通常は自分の身辺にいる日本人)と同じでなければ不安を抱く心理であり、日本人は「平等意識」が強いと言われる所以もこの「横並び」意識にその深淵があると思われる。バブルに熱狂したのも、バブルがあっけなく崩壊し泥沼に陥った心理的要因も、ここにあると思える。「横並び」意識が強くなければ、他の会社(人)がしているからわが社も投資をする(半導体工場に投資する、中国に進出するなど例は何でも良い)または投資を撤回すると各社が「同時並行的」に行うことはなく、景気の山と谷はもっとなだらかになったはずである。かつてアメリカに非難された車などの「集中豪雨」的輸出を思い起こしてもらえればよい。

その意味では、極端な例になるが、黒船のごとく言われる外資の「はげたかファンド」でも、日本人が「横並び的」に買う価値がないと判断している資産を購入して、資金回収の手助けをしてくれるので、大歓迎をすべき

が誇りに思ったのではないだろうか。筆者は当時まだアメリカ留学中であり、サンフランシスコの紀伊国屋へわざわざ買いに行ったことを鮮明に覚えている。日系の本屋へ購入しに行ったことが、そのブームがいかに日本国内的な現象でしかなかったかを如実に物語っているが。

なのである。今回はたまたま日本の資産が買収される方になったので、黒船到来と騒ぐのは大間違いであり、むしろ良い教訓と考えるべきであろう。

バブルの頃にアメリカの一等地や資産を日本資本が高値でしかも一斉に買いあさり、アメリカの一部で大きな社会問題になった。日本では経済力の象徴とする肯定的な論調が多かった。問題であると思ったアメリカ人の心理の底には、日本と同様なナショナリズムが当然あったろう。

この反発が今回の外資はげたか論と異なるのは、日本資本の場合は一斉に買いあさり始めた点であり、それが脅威と映ったのである。高値での買い物になったので、結局資産を売ったアメリカ側がもうけて、買った日本資本が大損している。この失敗が少なからず今回の不況を深刻にしていると思うのは、筆者のうがちすぎなのだろうか。まさに、踏んだり蹴ったりである。今度の「はげたかファンド」は、一斉に買いあさっているわけではない。あくまで独自の視点を持っているようなので、

その失敗によってアメリカ経済全体に影響を及ぼすようなことは考えられない。

筆者は、アメリカ留学中にヒッチハイク旅行をしたことがあるが、止まってくれた車のうち一台はなんと日本人数名が乗った車で、円高なので（70年代の後半だったので、まだ1ドル200円はしたと記憶している）アメリカに土地や資産を物色に来たと言う。しかも、特別な情報も持ち合わせず、完全なあてずっぽうのように、少なくとも私には思えた。他の企業もしているから自分たちもその波に乗り遅れるな、といった熱にでも浮かされたように感じられたが、間違いであろうか。

「未知との遭遇」の勧め

1 物理的な「異」

では、こうした「横並び」意識を脱却するには、少なくとも「横並び」的に考えていると自分を見つめられるようにするには、どうしたら良いのであろうか。最も手っ取り早いのは、かつて映画の題名にあった「未知との遭遇」または「異との遭遇」である。書物を読んで知識を頭に蓄えることは自分の知的世界を広げるために必要不可欠であるが、単なる記憶した知識で終わってしまう可能性があり、実際の分析に生かせないかもしれない。それに対して、自分が実際に「体験」する経験は、その知識を具体化してくれる上、新たな発見に繋がるかもしれない。つまり、自分を豊かにしてくれるのである。

同じ「異」の体験でも、建物や環境、自然な

こうした「横並び」意識の強さは、何も、皆が同じことをするばかりでなく、同じように「考える」、「状況認識」をすることにも当てはまる。つまり、現在の日本経済総悲観論も「横並び」の典型例なのである。一億総ざんげ論とか一億総白痴論などもかつてはあったが、すべて基本的には「同じ穴のむじな」であろう。世間が不況だ不況だと言ってもそれは一般論であり、好業績を上げている会社や業界も少なくはないのである。周囲に影響されて、「横並び」的に悲観論に陥る必要性はない。ピンチはチャンスだとの考えもある。

ど物理的なものから感じる「異」と、考え方や切り口などが「異」なる人間との接触は質的に「異」なる。物理的なものは、何回見ても同じものでしかない。したがって、見慣れてしまえば、何の感傷も抱かないあたりまえの風景（日常）に化してしまう。その時々自分の心理的・肉体的状況による感じ方の差は否定できないが、それは受け手である人間の状況によるもので、客体である自然の変化によるものではない。

また筆者の経験で恐縮だが、私はグランドキャニオンへ二度行ったことがある。初めて行った時は、その実に雄大な風景に心を打たれ、実にすばらしいところに来たと思った。だからこそ、もう一度行って見ようと思った

のであるが、二度目は落胆した。初めての時に感じた感動がないのである。その風景自体に感動し、風景以外の心に訴える何かを私は感じなかったためであろう。その風景を見て自然の長い営みや神々の力を見られる人は別であろうが、同じ風景であるには変わりなく

2 人間的な「異」

ところが「異」なる人間との交流は、常になんらかの新しい発見の可能性がある。人間は怪人二十面相のごとく多面的であり、怖さの反面面白さのある動物である。同じ日本語を話し、同じ日本文化の下で育ち、歴史的記憶を同じくする人々でさえ、考え方や観点の相違がある。まして、異なる言語、文化、歴史、宗教、経済的状況などの環境で育った人びとをやである。外国での生活が「未知との遭遇」として最適であることは論を待たない。

言葉の問題が克服できれば最善であるが、もし言葉に差し障りがあるとしても、日常生活様式、行動様式さらにはお役所の仕事振りなども観察できる。バス・電車・地下鉄などの公共交通機関の様子一つとっても、われ

3 パック旅行とバックパック旅行

同じ旅行でも、単なるパック型の海外団体旅行では、物理的空間は確かに「異」空間にいるのであるが、その精神的・心理的空間は日本のままでしかない。周囲の人も同じ日本語を話す、日本人だけである。バスに閉じ込められた凝縮日本が、単に外国を走っているに過ぎない。まして、何かあっても誰かが守

既視感（デジャ・ブ）にとらわれただけであった。同様な経験は欧州の美術館めぐりでもした。美術愛好家でもなんでもない私にとっては、ルーブル美術館のモナリザも同じであった。

われが慣れている日本方式と異なることが往々にしてあり、新鮮な発見であると同時に参考になる。それが、今までと「異」なる観点への糸口そして「横並び」的考えとの決別へと繋がる可能性があるからだ。これは大きな知的財産となり得る。そこに、留学などの海外長期滞在の価値がある。

もっとも、数年単位の長期滞在をすると、生活様式その他は全て「日常」の一コマになってしまい、何の発見も感動も生じない。しかし、長期滞在で言葉の壁を克服した時点から、初めて議論に耐えうる意見や考えの表明が可能になり、無限の知的世界が広がっていく。そこに、もっとも歓迎すべき知的な「未知との遭遇」がある。乞うご期待である。

り世話してくれるという、現在の都会ではあまり感じられなくなった、原日本的な伝統的集団社会を便宜的にはあるが心理的に形成している。その意味で、生きるに必要なはずの緊張感を感じずに済む構造になっている。逆説的に言うと、だからこそ安心してバック旅行に行くのであろう。そしてその安心感が

一因となって、日本人旅行者はいい「カモ」になっているのである。

こうした旅行の場合は、いかに海外旅行といえども、筆者が言う意味での知的な「未知との遭遇」の機会はずまいであろう。いわゆるリピート型の海外旅行でも、バック型旅行を選択する限り同じである。学生がするバックパック（貧乏自由）旅行ならば、精神的にも自立せざるを得ないので、物理的にも精神的にも「異」空間を漂っていることになる。

かく言う私もバックパック組であり、高校3年生の夏休みに2週間程度したのを嚆矢と

4 海外での長期滞在

熟年世代は、バックパック旅行に抵抗はあっても、まだまだ体力や健康にも自信はある、時間があれば何かしたいと思っている世代でもあろう。ならば、定年退職して時間的余裕ができれば、滞在型の海外個人（家族）旅行を考えたらどうであろうか。数週間程度ならば、退職前でも不可能ではない。趣味に生きるのもよし、地域的な活動に参加するのもよし、ボランティア活動をするのもよい。しかし、前に述べた「横並び」意識を自覚するには、海外生活というこれまでの日常生活と「異」なる生活を体験するのも一方であろう。いきなり長期滞在（数週間程度から数年まで）をするのはどうもと思っているならば、短期滞在（数週間程度まで）をまずは経験するのが良いであろう。いわゆる観光旅行は、短時間で数多くの名所旧跡を回ろうとするので、長期滞在の準備としては適さない。一箇所

して、大学時代は部活の夏季合宿を利用して北海道から熊本まで貧乏旅行をした。この間、全て駅頭や公園で野宿し、一度も宿泊施設に泊まらなかった。留学終了後は、アメリカを起点に欧州、東南アジアと貧乏旅行をして、日本に帰国をした経験をもつ。

熟年層にとって、この種の旅行は抵抗がある。かなりの冒険であり、危険と隣り合わせになる可能性が否定できない。年とともにつく思慮の深さが、若い時の無鉄砲さを上回ってしまう。筆者も、もうかつてのようなバックパック旅行をするつもりは失せている。

じっくりとその地の「日常」生活を模擬体験する必要がある。

海外ボランティアも、精神的準備の一環になる。何も大げさに考える必要は全くない。自分ができる範囲のことを割ける時間を使ってすればよい。無理は禁物である。ボランティアとは、もともと自分の自由意志でという意味合いの言葉であり、できる範囲でとの含意がある。例えば、国際的な活躍をする既存のNGO(非政府組織)のお手伝いをすれば、いろいろな海外事情に精通するようになり、日本では常識として想定できても海外ではないものとして行動しなければいけないことなど、生活上のさまざまな必要知識も得られるであろう。シルバー・ボランティアの制度だってある。自分が将来海外長期滞在をするための知識を得るために、ボランティアをするのは不純だなどと考える必要はない。何もしない

で孤高を保つよりは、結果的に誰かのお役に立てば良いではないか。若干の参考文献を本

稿の最後にあげておくので、それこそ「参考」にしてもらいたい。

海外長期滞在（ロングステイ）と擬似日常生活

1 海外在留邦人

『世界の統計』（総務省、平成 14 年度）によると、2000 年の海外在留邦人は総計で 81 万人を超える。うち長期滞在者（3 ヶ月以上の滞在者で永住者ではない邦人をさし、本稿で言う「長期滞在」またはロングステイと定義が異なることに留意）は 53 万人で、永住者が 29 万人となっている。十年前の 1990 年と比較すると、長期滞在者は 15 万人も増えている。『海外在留邦人調査統計』（外務省、平成 13 年 10 月現在）によると、在留邦人全体の男女別では、毎年ほぼ半々の割合で大きな変化はない。ただし、地域別に見ると、北米、西欧、大洋州では女性が多いのに対して、アジアでは男性がはるかに多く、南米でも男性が多くなっている。

『世界の統計』に基づくと、地域別では、アジアが 8 万人から 16 万人と倍増している。なかでも中国が 6 千人から 4 万 5 千人へと飛躍的に伸びているのが目にとまるが、韓国、シンガポール、タイ、香港なども 1 万人前後増やしている。また、率的にはマレーシア、フィリピンなども倍増している。オセアニアも 1 万 4 千人から 2 万 9 千人と、絶対数は少ないながらも倍増している。これに対して、アフリカや南アメリカは、もともと絶対数が少ない上に、ほぼ 1990 年当時と同じかむしろ減

少している。南アメリカの場合は、経済的要因が大きく影響したものと思われる。北米や欧州は、それぞれ 2 - 3 万人程度増えているが、増加率的にはそれ程大きくない。長期滞在型旅行が注目を浴びてきたのは、ごく最近の現象である点を考慮すれば、オセアニアの伸びにある程度は関連していると推測しても良さそうに思える。

『海外在留邦人調査統計』では、地域別の職業別長期滞在者数も調べている。そのなかでも本稿に関連すると思われる「その他」の欄を見ると、アジアが 2 万 5 千人で圧倒的に多く、ついで西欧の 1 万 2 千人、大洋州の 1 万人、北米の 8 千人となっている。全体の長期滞在者数に比較して、大洋州で「その他」の比率が 1 / 3 にものぼっているのが注目に値する。その他の地域では、おおよそアジアが 15%、西欧で 10%、北米では 5 % でしかない。こうした長期滞在者のうち、本稿で言うような長期滞在型旅行をしている人が何人いるか定かでない。統計上の数値にのぼらない人が大半であろう。したがって、あくまでも憶測の域を出ないが、仕事・留学その他の目的ではなく、本稿で言う「長期滞在型」は大洋州で多いのではと感じられる。実際、希望滞在国としては、大洋州諸国（オセアニア）

が多い。(図表1)

図表1 地域別の職業別長期滞在者 (人)

区分	民間企業関係者	報道関係者	自由業関係者	留学生・研究者・教師	政府関係職員	その他	計
アジア	118,490	586	3,035	12,949	7,192	24,661	166,913
大洋州	9,429	21	1,463	9,702	1,051	9,671	31,337
北米	117,920	1,521	4,283	76,491	3,878	8,054	212,147
中米・カリブ	2,221	14	168	191	1,459	255	4,308
南米	3,094	29	406	452	1,614	356	5,951
西欧	51,930	767	7,198	33,566	4,376	11,801	109,638
中・東欧・旧ソ連	1,639	96	216	1,080	1,008	307	4,346
中東	2,472	32	45	190	1,105	458	4,302
アフリカ	1,550	62	318	206	2,284	1,032	5,452
南極	0	0	0	0	0	40	40
全世界	308,745	3,128	17,132	134,827	23,967	56,635	544,434
全体に占める割合	56.7	0.6	3.1	24.8	4.4	9.5	100
前年(平成12年)の全世界計	295,419	3,298	16,684	131,644	24,395	55,245	526,685
/ -100	4.5	-5.2	2.7	2.4	-1.8	2.5	3.4

出所：外務省「海外在留邦人数値統計」(平成13年10月現在)

注) 職業を有しない家族(配偶者・子女等)の分は在留届筆頭者の職業に含めている。

2 長期滞在と擬似日常生活

海外に長期滞在するといっても、基本的には三つの型がある。もっともはっきりしたのは生活基盤を丸ごと移す移住型であろう。その他に、その外国にも生活拠点を設けるが、日本での生活基盤も確保した上で行き来する、いわば別荘型も考えられる。本稿では、海外で長期滞在するけれど、あくまでもビジターとしてで、生活の本拠は日本においておく方式を指して長期滞在またはロングステイと称する。

(財)ロングステイ財団(1992年に当時の通産省の認可を受けた公益法人で、この方面の草分け的役割を果たした)によると、この種の長期滞在は以下のような特徴を持つ。比較

的長期にわたる滞在、海外に「居住施設」を賃貸または所有、自由時間を楽しむことが目的、「旅」よりも「生活」をめざす、生活資金の源泉は日本におく、である。

第一の比較的長期の意味であるが、一応の目安として2週間以上3ヵ月以内の滞在を指すようだ。1週間程度では通常の団体旅行と変わりはないし、3ヵ月以内だとビザなし渡航が観光目的で可能だからだ。もっとも、あくまでの各人の状況により異なり、なかには1年以上の長期滞在进行している人もいる。第二の「居住施設」とは、炊事施設その他全てが整ったアパート、フラット、長期滞在者用ホテル(日本では、ウィークリーまたはマンス

リーマンションと称している)を指し、通常のホテルとは異なり、場所や国は異なっても自分で「日常生活」を送る一時的な「我が家」である。なお、こうした施設を所有する場合は、実質的に別荘型と変わらないであろう。

ロングステイといえども、滞在時間には限りがあり、正確には「日常生活」もどきの生活、すなわち擬似日常生活を送るという表現がより適切ではないだろうか。移住のように一生を暮らすという真の意味での「日常生活」を送るわけではなく、一時的にあたかも「日常生活」を送っているがごとの体験を意識的・意図的にするからである。自家撞着に聞こえるかもしれないが、非日常を「日常体験」しているのである。なんでもかんでもわずか数ヶ月のうちに体験できるはずがない。

ロングステイを有益なものにするためには、明確な目的意識をもつことが肝要であろう。目的別で多いのは、「生活や習慣にふれる」が54%、「自然の中でのんびり」が46%、「現地の人々との交流」が45%であり、残りは20%台以下になる。ロングステイの魅力は、自らの目的に添った擬似日常生活を「遊ぶ、楽し

3 「開けごま」

こうした限界はもちろんあるが、自分で「異」文化社会に非日常の「日常生活」を求めることで、島国日本の精神社会(一般的に日本人的特徴とか国民性と称されているものを抽象的に指す)を抜け出すための重くて堅い扉も徐々に開いてくる公算が大きい。使用する言語から始まって、ほぼ全ての体験が目

む、学ぶ」ことにある。

目的の三番目に「現地の人々との交流」があがっているが、一つ留意してもらいたい点がある。それは、現地の人々との間で生じるわずかな交流で、あたかも現地社会に「溶け込んだ」または「よく理解した」と思うのは早計であるということだ。学生をかつて引率した経験や各種の体験談などからすると、年代にかかわらず、すぐに精神的親近感や一体感を感じて「溶け込んだ」と思ってしまう人がいるようだ。しかし、相手は、あくまでも長期滞在する「観光客」すなわち客人(悪く言えばお金を落としてくれる)として遇している場合が多い。ホームステイの場合、慣れない家庭ならば、相手も同じような非日常を体験しているのである。

移住組でも現地社会に真に受け入れられ、まして「溶けこむ」など至難の技である。辛らつな評価であるが、同国人の日本人やアジア系人に囲まれている場合の反応と異なり、欧州系の外国人であると少しのことで舞い上がってしまう日本人が多い、というのが私のつたない経験に基づく卑見である。

新しいはずである。それは取りも直さず、自分が日本で培った精神構造(同じ日本人でも異なる個々人が持つ個性や考え方)に新たな刺激を与え、新たな知見をインプットすることになる。それが、今まで自分がもっていた精神社会の相対評価の可能性につながり、精神構造に変動を起こす可能性すら否定できな

い。

少なくとも、現地での食生活や移動方法その他の物理的相違が、肉体を持つ動物としての自分に何らかの新鮮な刺激を与えることは間違いなく、それが自分の意志に基づく能動的行動（バック旅行などは能動的行動とは見なさない）の帰結としてあるので、単なる肉体的刺激にとどまらず精神的刺激も与える可

能性がでてくるのではないだろうか。それが、さらには、自己実現とか生きがいの発見の源泉になるかもしれない。いずれにせよ、日本社会を抜け出せば、異国の地なので緊張感もあるが開放感もある。開放感とは、日本社会自体に閉塞感があることと非日常の世界にいる実感から生じると思われる。

人気希望先概観

1 人気希望先とその理由

（財）ロングステイ財団の資料によれば、滞在希望国はオーストラリア（15%）、ハワイ諸島とニュージーランド（それぞれ10%）、カナダ（9%）、スペイン（8%）の順となっている。オセアニアの人気が高いことがわかる。地域的には、太平洋・オセアニアが37%、欧州が33%であるのに対して、北米は15%、アジアは9%でしかない。アメリカの人気は低い点は、治安問題などが敬遠されたのであろうか。アジアの中では、マレーシア（3%）、フィリピン（2.8%）が群を抜いて多く、次にタイ（1.8%）が来ている。欧州に目を転じると、スペインの次はイギリスで5.7%、スイスとイ

タリアが3.9%で続いている。いずれも、アジア最大のマレーシアより人気がある。（図表2）

日経新聞による日本人（50歳以上）が老後に住みたい地域・国に関する調査では、オーストラリア、ハワイ、ニュージーランド、カナダ、スイス、スペイン、米国、シンガポール、英国、スウェーデンの順に人気があった。上記の調査結果とほぼ同じである。希望理由は、「好きな国」が15%、二番目が「治安のよさ」と「物価が安くゆとりのある生活が可能」の14%で、三番目に「自然の美しさ」が12%で続いている。

2 太平洋・オセアニア

オーストラリアやニュージーランドの人気は、「治安のよさ」が最大の要因であるが、治安が悪くなったと言われる日本よりも治安は悪いのが普通である。殺人などの凶悪犯は多

くないが、窃盗などは別問題である。また、ニュージーランドでは性犯罪が増加の傾向にあると言う。用心するに越したことはない。その他に、気候が良いことや自然環境の美し

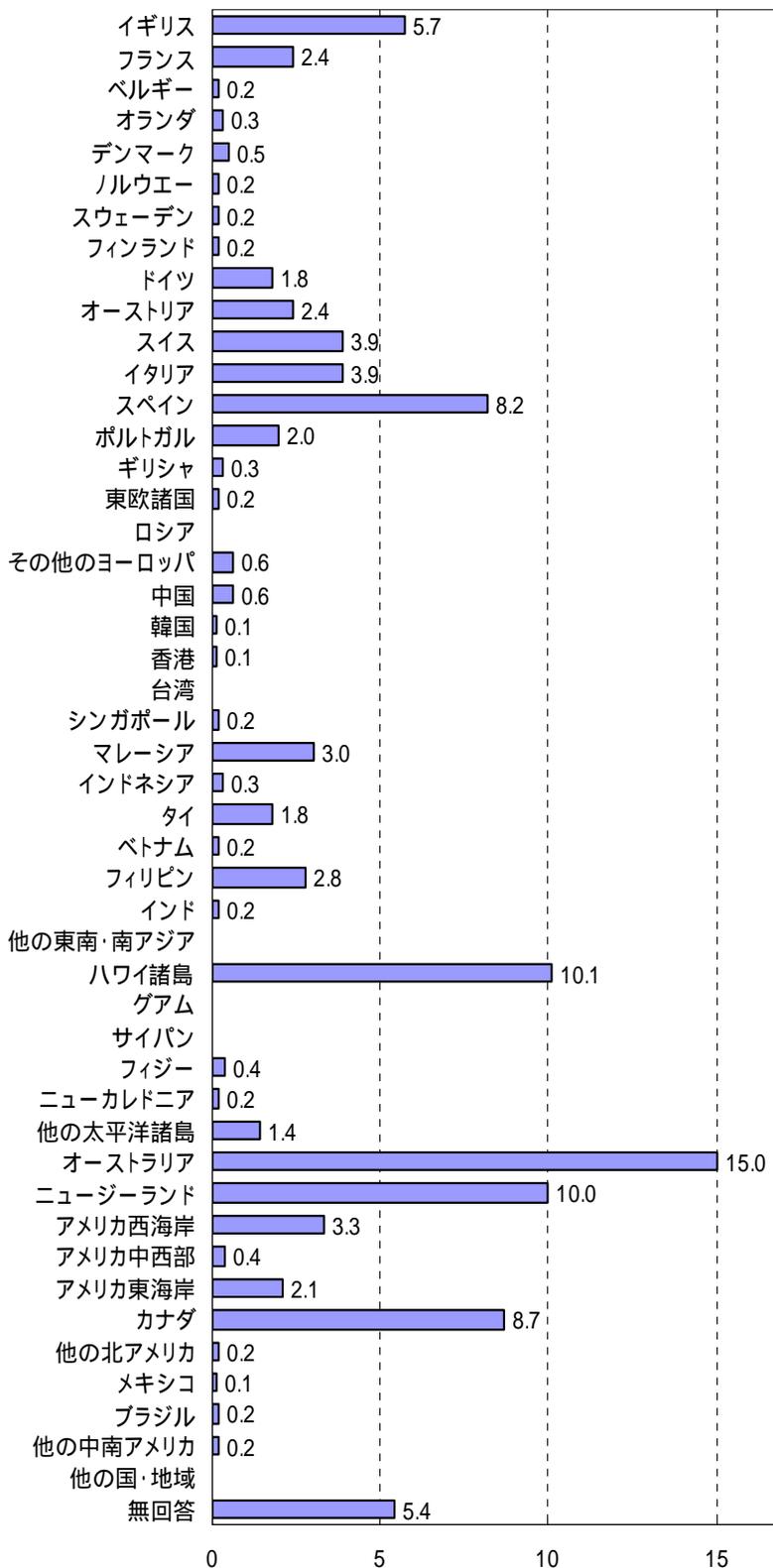
さも大きな理由となっている。特にニュージーランドでは、自然環境の美しさをあげた人が多い。ちなみに、自然環境で首位に立つのはカナダである。人口や国土の大きさからすると、ニュージーランドの人気の高さが注目に値する。英語圏であることも安心感に繋がっているのであろう。

この両国は一般的にきわめて親日的である。しかし、オーストラリアは1973年まで「白豪主義」をとっており、また太平洋戦争で日本と戦い、日本軍が捕虜の扱いを粗末にしたため、あくまでもごく一部でしかないが、なかには反日感情を抱く人がいることを承知してもらいたい。これは、東南アジア諸国にも言えることである。

ハワイ諸島が人気なのは「気候が合う」が最大の理由である。いまやハワイは、外国とは思えないほど親しみを持って語られている。同じアジア系が多く、

図表2 ロングステイの希望国

(単位：%)



出所：(財)ロングステイ財団の資料より

日本食は日本本国と同様にふんだんにあり、ましてワイキキ近辺では日本語・日本円が通用するので安心感があるのであろう。ただし、同じオアフ島でもワイキキの反対側へ行くと、ほとんど日本人観光客は見かけず、普通の住宅街が続いていた。また、ワイキキのすぐ近くに真珠湾があり、アリゾナ記念館などはアメリカ人その他の観光客がいっぱいいたが、日本人はほとんど見かけなかった。真珠湾というと日本人の卑怯さ、ずるさの象徴のような印象があり、わが国の過去を認識するうえでは重要であろう。なお、湾岸戦争で有名になったトマホーク（ピンポイント攻撃型の巡

航ミサイル）の実物模型も真珠湾で見られる。

アジアでマレーシアの人気が高いのは納得できる。マハティール首相の下で政治的に安定しており、治安も特に不安は感じなかった。それでいて、生活に不便は感じず物価も安かったし、気候的にもしのぎやすい感じがした。フィリピンは、やはり治安の問題があると一般的に思われているのではないだろうか。ただし、日本人がロングステイするような場所は、通常は門番がいる閉鎖型の地域社会を形成しており（分かりやすく言えば、フェンスで囲まれたような場所）その中にある限り安全である。

3 スペインと個人的感慨

欧州でスペインが一番なのは、やはり気候温暖であり、また海辺に面したマンション（日本でいう）はリゾート感覚を日本人に与えるのであろう。スペイン人の印象が明るく開放的で、さらに観光名所が多いこともあるかもしれない。これがスペインを好きになる理由ではないだろうか。また、スペインでは「学びたい目的にかなった設備・環境が整っている」も「好きな国」と同様に魅力になっている、とロングステイ財団の調査結果にでていいる。この場合の「学びたい目的」とはスペイン語もあるかもしれないが、その他の絵画や美術、彫刻、陶器、料理などが影響しているのではないかと推測する。

またまた筆者の経験で恐縮であるが、スペインの海岸から山よりに入った陶器（彫刻かも知れない）で有名な田舎町へ行った時の話

である（町の名前は思い出せない）。こんな田舎町にはさすがに日本人の団体客はいないだろうと思っていたのに、意外や意外なんとバスから降りてきたのは日本人の団体旅行客であった。こんな田舎町にまで団体で来るのかと感心したと同時にあきれ返り（バスから降りてくる団体旅行の日本人という印象がどこで出会っても同じなので）スペインブームなのかもしれないと思った次第である。

その時、欧州をバックパック旅行していた若い時代に、ドイツ・ミュンヘン近郊にあるナチスドイツ時代のダカオ（ダカウ）強制収容所へ行った帰りを思い出した。11月頃の寒い時で、みぞれ混じりの陰気な天気であったように記憶している。ちょうどユダヤ人を虐殺したガス室を見た帰りで、天気のせいもあったと思うが、心身ともに実に寒寒とした感

いで収容所施設から出てきた時のことである。

その時の私の感じや場の雰囲気合わない人たちがたくさんバスから降りてきたなと思ったら、なんとこれが日本人の団体旅行客であった。ガス室を見学に来るくらいなので、きわめて真面目な社会的意識の高い人が多かったであろうと後で推測したが、何せその時はなんと場違いな「観光」まらだしの入びとだろうと感じた。その場違いな雰囲気が強烈な印象として残っていたため、このスペインの山の中の町で見かけた日本人も、同じようにバスから降りてきた団体旅行客であった点で、奇異な感じがしたのであろう。

蛇足になるが、ついでにもう一言。欧州滞在中にポーランドにまでわざわざ足を伸ばし

4 その他の欧州諸国

イギリスがスペインの次にくるのは、英語国なので語学留学の需要が圧倒的に多いためのようだ。イギリスといっても、北と南では気候が全く異なるが、かつての大英帝国の歴史など伝統の重みを感じさせるので、「好きな国」にもなっているのであろう。イタリアは、スペインと似たような印象があるようだ。ローマ帝国からの伝統で建築物には優れたものが多い。ブランド物のイメージもあるかもしれない。

スイスは、かつて「日本を東洋のスイスに」という教育を受けた筆者の世代からすると、やはり治安が良くて政治的・経済的に安定しており、しかも自然に恵まれ、日本人の間でも人気の高いグリーンデルワルド（ユングフ

て、アウシュビッツ収容所を見学したことがある。有名な記念施設を見学した後、近くにある収容所施設の跡（基本的には原っぱだった）に行ったが、たまたまイスラエルからの高校生と思いきこれまた団体旅行集団（修学旅行のように感じた）に出会った（イスラエルからとは持っていた国旗でわかった）。高校生はどこでも同じようで、キャーキャーと実に騒がしかったが、収容所跡を見たときにシーンとなったのが、それまでのしゃぎようと対照的で印象に残った。親戚などの近親者が犠牲になった生徒もいたのではないだろうか。ダカオで見かけた日本の団体客も、収容所を見学した後だったら雰囲気が異なっていたかもしれない。

ラウヨッホ）など観光名所も多く、スキーも満喫できるといった点が人気の理由なのであろう。しかし、実際に在住した経験からすると（フランス語圏の国際都市ジュネーブであり、大多数を占めるとどちらかといえば閉鎖的な農村地帯が多いドイツ語圏とは異なり、英語もかなり通じてはるかに暮らしやすい）、一般的に物価が高く、かなりの資産家でないと悠悠自適とはいかない。また、アジア系の食品・食物は当然のことながら質量ともに貧弱で、値段ももちろん高い。

したがって、それこそ1ヵ月や2ヵ月程度のロングステイならば十分満足のいく生活はできると思うが、何年も住むとなると、閉塞感を感じるのではないだろうか。手元不如意

ならばなおさらであろう。シンガポールに夏休みの間何回か1ヵ月弱滞在したことがあるが、ちょうどそのとき感じた閉塞感と似た感じがした。欧州大陸の真中にあり、国連欧州本部その他たくさんの国際機関があり、しかも重要な外交交渉の舞台であるなど、日本では全く感じられない世界の動きを感じられるし、しかもいろいろなところに車で出かける絶好の位置にあるなどの利点は多くあるが、どうしても小さな田舎都市のように感じてしまったのである。

ところで、花の都パリを持つフランスの人

気が低いのはどうしてなのだろうか。フランス語である点が問題なのであるだろうか。そうならば、スイスも同じで、主としてフランス語かドイツ人にも通じにくいドイツ語をしゃべる。地中海沿岸の南仏の田舎など、若干お金がかかるが数ヵ月の滞在にはもってこいだと思う。ジュネーブからは車で高速を飛ばすと(120Km程度はあたりまえであった)その日のうちに行けるため、我が家は休みとなるとよく南仏に出かけていた。気候も抜群だし、なにせ海産物がすばらしい。

心配・不安なこと

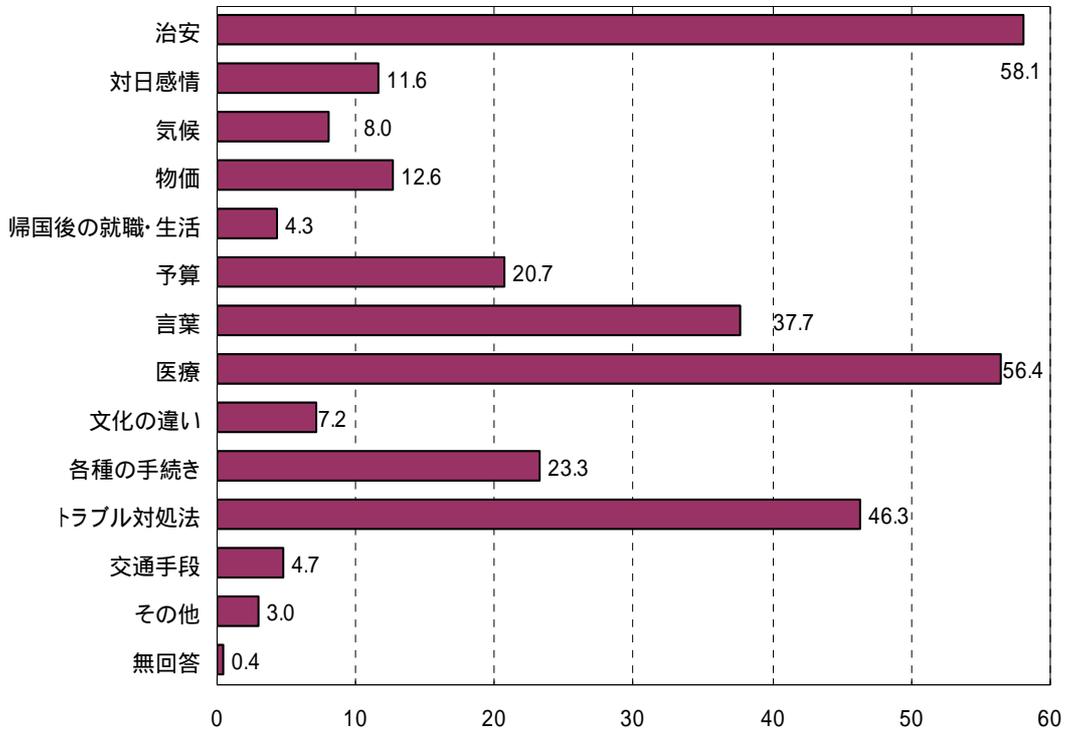
1 治安

不安なことは、「治安」が最も多く58%あり、次に「医療」が56%で続き、そして「トラブルへの対処」が46%、「言葉」が38%となっている。やはり「治安」が最大の不安要因のようである。また、熟年世代以上の高年齢層の方々が多いせいも、医療・健康問題も大きな関心事項になっている。その次の、トラブル問題と言葉は世代にかかわらず気になる問題であろう。人気のある希望先は、いずれも比較的「治安」が良い地域・国である。だからこそ、人気希望先になっているのであろう。(図表3)

ロングステイといえども日本人は警戒心が足らず、また現金を持ち合わせる傾向があるので、狙いやすいことは確かである。最近は、「水と安全はただ」と思っていると揶揄されてきたわが日本でも治安は悪化してきたが、それでも危ない場所とか状況、時間帯などの勘所は押さえている。見知らぬ土地まして海外ではそういった勘も持ち合わせていないうえ、日本人は良い「かも」というのは常識であるから、特に狙われやすい。そのため、「治安」事情は当然のことながら気になるところである。

図表3 心配・不安なこと

(単位：%)



出所：(財)ロングステイ財団の資料より

またまた我が家の例で恐縮であるが、普段着のジーパンを穿き車も古い大衆車であったので、「かも」には決して見えなかったはずの我が家でも、イタリアでは二人組が体ごと妻にぶつかってきて財布を盗もうとした。スペインでは妻が車のトランクを開けて中の整理をしていたら、隣に私が立っているにもかかわらず、財布を入れていたウエストポーチを狙って（おそらく行動を監視していて、ウエストポーチの中に財布を入れていたのを確認したのであろう）取ろうとしたのを、妻が奪い返して事なきを得た経験をした。私は役に立たない木偶の坊で、まったく気がつかなかった。警戒して、隣に立っていたつもりだったのに。高速道路の休憩所でのことだったので、そのまま走り去られたらどうにもならな

かったと思う。その当時の同僚は、ベンツに乗っていたせいもあると思うが、フランスの高速道路の休憩所で食事をしている間に、トランクの鍵を壊され金目のものは軒並みとられたこともあった。

警戒するのは、すりやひったくり、強盗などで殺人などの凶悪犯は少ない。拙宅の経験のように、すぐ横にいても安心できず、ちょっとした隙を狙った置き引きなどが頻発している。さらに、タクシー運転手が犯罪組織と癒着している場合すらあるので、いかにも金持ちみたいな素振りはいらない方が良い。日本ではごく普通の服装やブランド品でも、場所によっては「金持ち」と見なされる点に留意すべきであろう。いずれにせよ、多額の現金はなるべく持ち歩かない方が良い。

2 医療・健康

医療制度は、国によってだいぶ事情が違う。したがって、一概に言えないが、ロングステイといっても数ヵ月の場合は、日本で海外旅行傷害保険に加入しておくことは必須である。特に、歯の治療は済ましておくこと。さもなければ、高くても歯痛もカバーできる保険を勧めたい。私の場合、アメリカでもスイスでも、歯をカバーする保険に入っていなかったため、一回で10万円近く取られた記憶がある。保険に入らない方が悪いのであるが、スイスの歯もカバーする保険は極端に高かったので入らなかったのである。日本の健康保険料も高くなってきているが、歯医者にも適用可能なのでかなりましとの印象をもっている。

さらに、日本語での24時間対応サービスや救急対応サービス、提携病院であれば保険金の請求手続きや治療費の支払いが必要ないなどのサービスもある。お金はもちろんかかるが、言葉の不安などを抱え、万が一に備えたい向きにはお勧めする。旅行用の英文の医療証明書も持っていけば、過去の病歴や常備薬、家族の病歴、アレルギーや喫煙の有無など治療に役立つ項目が一目でわかるので、安心である。

人気のあるオーストラリアではメディケア制度があり、ロングステイ者（家族を含む）も永住ビザを取得すれば対象になるので、加

入すると安心である。負担は日本より少ない。ただし、ここでも歯科は対象外である。しかし、ほとんどの人は加入できないので、医療費は100%自己負担となる。したがって、先述したように、海外旅行傷害保険などへの加入は必須となる。緊急時の救急車代は請求される可能性もあり、例えばオーストラリアのケアンズでは有料で通常数百ドルかかるそうである。また、スイスでも高山病などの山岳事故に遭ってヘリコプターを使ったとしたら、その代金は請求されるので、高額の出費を覚悟しておかなければならない。

東南アジア諸国の場合は医療の質を心配するかもしれないが、階級社会的側面が色濃く残っているため、変な言い方であるが高所得層が受ける医療は日本と遜色ないそうである。日本人は、国内ではごく普通の中産階級でも、東南アジアではお金持ちになるので、高度な医療を受けることになる。またまた我が家の経験を申し上げると、10年程前にマレーシアの東海岸に数週間滞在していたことがあるが、まだ幼児であった子供が病気になり町の普通のお医者さんにかかったことがあった。そのお医者さんはインド系であったが、こちらの要望をしっかりと聞いてくれたし、処方も間違いがないという印象であった。もっとも、子供が注射を嫌がり、そのお医者さんを平手打ちするというおまけまでついたが。

3 トラブルへの対処

三番目の「トラブルの対処法」は、言葉の問題だけでなく文化的背景の相違も絡み、厄介な問題である。もっともよく言われる初歩的なことであるが、われわれ日本人はすぐに「ごめんなさい」と言ってしまうが、それでは自らの責任を認めたと解釈される公算が大きい。裁判や警察沙汰にならないにしても、責任を負われ窮地に陥る可能性が否定できない。ただでさえ、なかなか自分の責任を認めようとしませんが、私の経験では普通である。一般人だけでなく、学者も役人もそうであった。

現地の弁護士と個人的に契約する精神的・財政的余裕や「つて」のある人はまずいないであろう。日本大使館や領事館は、あまり期待できない。助言をもらえるような在留邦人や知り合いとか現地の友人がいればまだましであるが。それでも、ニュージーランドに移住したある日本人の弁によると、何でも頼られて閉口したそうである。ロングステイだからこそ、「自立」を旨とすべきであろう。料金は当然かかるが、ロングステイの紹介をビジネスとしている団体・企業が結構多いので、

その種のサービスに頼るのも一案であり、安心できるかもしれない。

レンタカーなどで自動車を使用する場合は、交通事故の可能性も考えておかなければいけない。日本と異なり、車検制度はないと思っ
てよい。しかも、なかには自動車保険に入っていない運転者がいるので、当て逃げの可能性もその分高い。例え相手に責任があると認定されても、支払能力がないために実質的に自己負担になる可能性も否定できない。そのための保険もあるほどである。したがって、もし車を運転するならば、多少高くついてもいろいろなオプションのある自動車保険に入っていた方が安心であろう。なかには、弁護士の用立てやその費用もカバーする保険があると聞いている。

言葉の問題は、単なる生活体験だけですむなら、それほど気にしなくとも良い。自動翻訳機や電子辞書で当座は間に合う。しかし、トラブルがあった時は、それでは間に合わない。通訳をしてくれる人がいればよいが、特効薬はない。やはり、地道な普段の努力しかないだろう。

情報収集その他

1 生活情報の収集

わが国における定年夫婦の平均生活費は、おおよそ 27 万 3000 円と言われている。この

金額では、日本では決して裕福な生活はできないが、海外では可能になる。オーストラリ

アでも、家賃を入れても夫婦で 25 万円（日本の一般的な年金額）もあれば十分で、かえって貯金ができるくらいである。というのも、夫婦子供二人の標準的な家庭の生活費は、月 2200 ドル程度（現在 70 円近辺なので 15 万円強）であり、もし夫婦二人ならば多少贅沢をしてもお釣りが来るからだ。東南アジアなら月 5 万でも可能である。

こうした情報の入手は、(財)ロングステイ財団の定期刊行物（「Long Stay」）、「ロングステイ白書」や各種セミナーを利用するのがもっとも手ごろであり、信頼できるであろう。こと細かなハウツーも教えてくれる。インターネットを使っているならば、「ロングステイ」や「長期滞在」などのキーワードで検

2 成功の秘訣

海外で現地の方々との交流を円滑にする潤滑油は、なにか自信を持って教えられる技術・知識などを持つことである。何も難しく考えることはない。海外で案外と人気があるのが、折り紙のつくり方を教えることである。大げさな表現をすると、一種の魔術のごとく思う向きがあるようだ。少し大掛かりになるが、浴衣を用意して盆踊りを披露するのも一方である。それから、もし道具があればの話だが、太鼓も人気がある。音楽や踊りは世界共通で、言葉は要らないので便利である。

言葉に不自由があるにしても、日本のことに関する知識は重要である。海外へ出たら否応なしに「日本人」という看板を背負って生活することになり、当然日本に関することを

索すると、たくさんのサイトが出てくる。ビジネスとして、ロングステイの紹介・照会をしているサイトもたくさんある。そこから、いろいろなサイトにリンクもできる。先述したが、ビジネスとしてロングステイの紹介をしている日本人（企業）が結構多い。そうした会社のパンフレットなども実に綿密な必要情報を載せている。その他に、定年後の海外生活に関する書物も少なくない。

しかし、いくら書物やセミナー体験談を聞いて知識を蓄えても、個々人の感性により感じ方が異なる。そのため、少なくとも一回はバック旅行でもかまわないので実際に現地を訪問し、ロングステイする価値があるか自分で判断することが肝心であろう。

質問される機会が増える。もし、質問に適切な答えができないならば、その人の教養が疑われる事態となる。日本へ帰ればごくあたりまえの市井の人でも、外国では国旗を身にまとっていることに留意して欲しい。それが現実である。

この指摘を聞いて、もし何を仰々しく言っているのだとか民族主義者の戯言などと思った人がいたとしたら、それこそ現実の世界を知らない島国日本の住民であると私は反論したい。地球市民を標榜しようとも、海外へ行く日本と日本の賃金水準の高さの恩恵を受け、また日本国の旅券を持っている恩恵を受けているのが現実である。それが証拠に、日本国の旅券であれば、あまりいろいろ聞かれること

なく入国審査を通過できる。

最後に、最初の方でボランティアの可能性を指摘しておいたが、自分の腕（技術だけでなく知識も）に自信がありまだ元気があって働いても良いと思っている人は、海外企業を

考えたらどうだろうか。海外では、技術を身に付けた日本人を欲しがめる企業がまだまだいっぱいある。第二の人生かもしれないが、自分の人生を主体的に生きるための挑戦として面白いではないか。

<参考文献>

- ・岩波書店編集部（編）『ボランティアへの招待』（2001年）
- ・毎日新聞社（編著）『国際ボランティア講座』（1997年）（とくに「国際ボランティア 現場からの報告と日本の課題」と題した報告が、非政府組織と政府・国際機関の立場の相違、それに伴う長所や短所などを明確に指摘しており、推奨にあたいする。）
- ・（財）ロングステイ財団（編）『極楽ロングステイガイド』講談社、2002年
- ・同上、各種パンフレット
- ・布井敬次郎『定年後の海外暮らし』KKベストセラーズ、2000年
- ・ケアンズ・クオリティ・オブ・ライフ・オーストリア「オーストリア・ロングステイについて」2001年
- ・その他、インターネットや定住者への電子メールによる聞き取り